

過疎活性化にみる「都市－農村」関係の諸相

—Iターン移住者を巡る地域のダイナミズム—

高 木 学

はじめに

日本の過疎問題に対しては、これまで62兆円を超える規模の地域活性化事業がおこなわれ、道路・電気・水道・学校など多くの施設が整えられてきた¹⁾。この事業によって生活基盤の面において都市部と農山村の格差は着実に縮小してきた。しかしながら、現在の過疎地域は国際情勢を含めたマクロな状況のなかで、今までにない厳しい問題に直面している。例えば農作物の国際的な自由化や過疎化による人口減少と高齢化など数多くの難問を抱えている。これに対して行政では、都市部と農山村をより緊密に連携させる方策が採られるようになってきた²⁾。1998年に制定された「21世紀の国土のグランドデザイン」（通称五全総）では、スローガンとして「多自然居住」という概念が提唱され、都市側が農村の自然を享受しつつ、農村は都市の高度なサービス・情報を利用するという「創造的な相互補完関係」が目指されている。

両者の連携の姿は、観光やグリーンツーリズム、児童交換留学など様々な形で見られるが、筆者が注目するのは、都市を離れ地方へと移動する人々、特に、まったく縁のない過疎地域に向かうタイプの移住である。これらは「脱都会」「田舎暮らし」ムーブメントとして注目を浴びており、上記の「多自然居住」の最前線に生きる人々とも言える。このように都会に住んでいた人々がまったく縁のない過疎地域へ積極的に移り住むことは、Uターン・Jターンと区別して、「Iターン」と呼ばれている。³⁾

Iターン移住では、観光やグリーンツーリズムとは異なり、移住者と過疎地域住民による日常的な

¹⁾1970年制定の過疎地域対策緊急措置法から、域振興特別措置法、疎地域活性化措置法まで10年ごとに改正施行されてきた。

²⁾本稿での過疎地域とは、過疎地域活性化特別措置法に定められた、「過疎地域の要件」に該当する地域を指すものとする。都市は、便宜的に「過疎地域」以外の地域とする。

³⁾Iターンとは、80年代末の過疎活性化対策のキャッチフレーズとして使われた用語である。地方出身者が一旦都市での生活を経験した後に、別の地方へと移住するタイプを「Vターン」として区別する場合もある。本稿では、煩雑さを避けるため、I・Vの概念をあわせ、都市での生活者が関わりのない過疎地域へ移住する現象を一括して、「Iターン」と呼ぶことにする。

社会生活が営まれており、そこには持続的なコミュニケーションがある。そのコミュニケーションの過程には、現在の日本の社会における新しい都市と農村の関係性が投影されている。しかしながらこれまで「Iターン」に関しておこなわれた分析では、都市住民の志向・動機の分析であったり、失敗しない移住の模索であったりと、都市住民や移住者側の分析に終始しているものが多かった。本論では、移住者を受け入れる過疎地域の状況や過疎問題の深刻さ、過疎対策の歴史などを把握した上で、地元住民とIターン移住者の相互作用に焦点を当てていきたいと考える。これまでの棚田オーナー制や農村留学などのような過疎地域と都市を積極的に結びつける活性化事業においては、都市と過疎地域の間には、社会構造・住民意識などに関して大きな違いがあることが大きく取り上げられてこなかった。しかし現実におこなわれているIターン移住では、地域社会の中で否応なしに両者の差異がぶつかり合うはずである。Iターン移住のなかでこれらの違いは、どのように現れ、どのような現象を生み出しているのか。そして人々はこの違いをどのように受け取り、取り扱っているのか。これらの点について、本論では実際におこなわれているIターン移住の地域生活を分析し、活性化対策と「Iターン移住」を結びつけることの可能性と限界を探ってみたい。そして今後の過疎地域活性化事業における都市と過疎地域の連携のあり方を考える一助となれば幸いである。

1. Iターンと過疎地域活性化

まずIターンの概念を整理してみると、Iターンとは、自ら選択して出身地以外の縁のない土地へ移住することと定義できる。見知らぬ土地への移住という点では、出身地への帰郷であるUターンとは異なり、大きな社会関係の変化を余儀なくされる。また居住地移動とともに職業移動がおこなわれる場合が多く、職業移動のない転勤や単身赴任、郊外への転居などとは区別できる。またIターンには経済的な上昇が望めないという特徴もある。よりよい就職や文化を求めておこなわれることの多いUターンの場合や、また経済的な上昇を望んで旅立っていく国際的な移民の場合とは異なっている。このようにIターンは、これまでの多くの移住にはみられなかったさまざまな特徴をもつ。Iターンとは、自分を取り巻く社会環境や経済状況に左右されるのではなく、自分の価値観に従って、そのイメージを実現するための移住なのである。

このような形態の移住が現れてきたことの背景には、都市の限界が顕在化してきたことがある。高度成長期以降の、大気汚染や騒音などの公害や、過度の集積からの土地・住宅問題、全体が見渡せない生活からくる不安感や生き甲斐の喪失など、環境問題から目に見えない心の病理まで都市側の問題点が大きく立ち現れてきた。その結果、都市の求心力は弱体化し、これまで多くの人が盲目的に追いかけてきた合理主義や成長志向を疑問視する動きが高まり、新たな暮らしのあり方を求める人々が増えてきたのである。まさに近代化・都市化を支えてきた価値観が変わってきたことの証とも言えよう。すなわちIターンとは、田舎の復権、過疎の復活といったノスタルジックな現象というより、20世紀

を貫いてきた価値原則に反旗を翻した「生」であり、近代化・都市化の果てのオルタナティブとして現れた新たな生き様の1つと考えられるのである。

一方、過疎地域においては、1990年代になって過疎化への対応策の行き詰まりが現れてきている。過疎問題に関しては、1970年以来過疎関連法を中心に、道路・公共施設・水道などの基盤整備がすすみ、過疎地域への中小企業・工場誘致にも大きな成果をあげた⁴⁾。1980年代には、各自治体の独自性を活かした振興策が始められるようになり、「町おこし」「村おこし」として大変盛んになった。これらの事業は、放っておけば衰退していく状況に対して歯止めの役割は果たしたものの、人口の増加や高齢化の防止にはなりえていない状況である⁵⁾。

このような活性化の限界に対して80年代後半から、都市部での「脱都会現象」を利用して、特定の人により深く地域に接してもらおうとする「都市-農村交流事業」が見られるようになった。稲刈り体験や棚田オーナー制、リンゴオーナー制など現在まで多くの取り組みがおこなわれている。不特定多数の観光客や都市の消費者に地域を商品として売り出すのではなく、対象を絞り込んでコネクションを作り出すことによって、消費者の囲い込みとマーケティングをおこない、地域の活性化に役立てようとするのである。

一方、一過性の観光や交流ではなく、地域で暮らす定住者を増やそうという働きかけは、過疎対策と同じく70年代から始まっていた。当初は出て行った人々を呼び戻す、いわゆる「Uターン」志向した対策であり、主に公営住宅の建設・Uターン奨励金・結婚奨励金などの施策がおこなわれた。しかし、過疎地での雇用が少なく、生活条件も大きくかけ離れているため、過疎地域に戻ってくる若者は少なかった⁶⁾。

しかしながら80年代からの都市での「脱都会減少」や「都市=農村交流」型事業の盛り上がり、そしてUターン対策の限界を背景として、Uターンだけでなく、町外出身者以外に対しても移住の支援をする自治体が見えてきたのである。受け入れ援助の方法は様々で、定住奨励金・資金低利融資・農地リースの斡旋・補助・住居斡旋・空き家斡旋・新たな住宅の建設・土地提供など多岐にわたっておこなわれている。現在、全国数百の自治体で都市からの移住者対策はおこなわれており、これらに

⁴⁾企業誘致の結果は、農村から都市への変貌ではなく、都市と農村の関係性が保たれたままのスライド変化をもたらした。例えば交通網の整備によって、商業経済的に近隣の都市部へ組み込まれるようになり、地元の商店は衰退するという結果を生じている。また企業誘致に関しては、過疎への工業立地に安い土地・労働力を前提とした下請け的な部門が多く、仕事内容や賃金に格差が生じている。

⁵⁾村おこしの活性化は、成功し全国的に有名な自治体があらわれてくる一方で、町おこしの氾濫によって各地域の独自性が色あせてくるようになった。温泉や木工芸など地域の財産を活かしたものであっても、全国の農山漁村の中では、似たものが多くなり珍しくなくなってしまったためである。

⁶⁾「Uターン」志向の定住策が過疎地域において限界があるとは早くから指摘されていたものの、門戸を広げることは長い間されてこなかった。本来、自治体の事業は住民福祉に向けられるべきものという大前提のためである。

よって都市に住むIターン希望者たちの「田舎暮らし」がより容易になってきている。

2. 受け入れにいたるまで ——事例分析から——

ここからは、実際のフィールド調査によるデータから過疎地域活性化のあり方を見ていきたい。1つは日本海の隠岐諸島にある半農半漁の過疎村における「Iターン」受け入れの事例であり、もうひとつは中国山地にある農村の「Iターン」受け入れの事例である。

この二つは、同じように都市からの移住者を受け入れ事業でありながら、多くの点で対照的な特徴を持っており、現在の「Iターン」受け入れ事業の持つ可能性と問題点を把握する、とてもよい材料を提示してくれる。以下では、地域の状況、過疎化対策の歴史、受け入れ制度について、それぞれを比較した後、移住者生活世界と受け入れる側の反応などを二つの地域で比較しながら、Iターン移住の様相を掘り下げてみたい。

	離島漁村(島根県隠岐郡知夫村)	山間農村(島根県仁多郡横田町)
人口・世帯数	871人 (243戸)	8411人 (2311戸)
高齢者率	39.50%	27.30%
若年者率	5.10%	11.30%
主な産業	漁業・牧畜・観光	農業(米・野菜・花卉)・工業(アパレル・機械)
過疎化対策	基盤整備(道路・港湾設備拡充)	基盤整備(道路・文化施設・学校・農業基盤の整備) 国営農地パイロット事業 ふるさと町民会議
受け入れ援助	800万円相当 生業補助(船か牛を10年間貸与) 空き家の改修	金銭援助なし 空き家バンク制度(空き家情報の斡旋) 定住相談員
移住者	1992年から、7組	1995年から、22組
移住者の生	サザエ・アワビ漁、肉牛の繁殖	工芸家、農業研修生、その他

2-1. 離島漁村の事例 ——隠岐諸島・知夫村——

【地域概況】 調査した地域は島根県隠岐郡知夫村である。日本海の山陰沖にある隠岐諸島の一部をなす知夫里島にある、人口871人243世帯の村である。過疎化の状況は非常に深刻で、65歳以上の高齢者人口率が約40%近く、過疎地域平均と比べても非常に高い数字である。交通手段としては、本土との間を2時間で結ぶフェリーが1日に2往復、隠岐諸島間の連絡船が1日に3往復あるが、その運航は天候に左右されやすく、冬場などは1週間近く交通が絶えることがある。

産業は第一次産業中心であり、漁業と畜産業が主である。農業は自給程度の野菜の栽培があるのみで、水稻は一切おこなわれていない。林業は労働力の不足と松の立ち枯れ被害により十分な管理・育成ができていない状況である。

漁業は1トンまでの小型の漁船による沿海での刺し網漁を中心に、浅い海でのサザエ・アワビ漁、ヒラメ・ハマチの養殖などがおこなわれており、牧畜業では、牛・馬が島の山間部で放牧されている。

主に牛・馬の繁殖がおこなわれており、子牛が1才になった時点で日本各地の肉牛産地に売却する方法が採られている⁷⁾。

地域的な集団としては、まず、町内会にあたるものとして区会がある。地域の掃除や地域の祭祀など様々な共同作業がこれを単位としておこなわれる。またその他、青年会や婦人会、趣味の同好会などのグループ活動もみられた。教育施設は保育所と小中併設の学校が1つあるだけで高校はない⁸⁾。8割以上の若者が、村には戻らず本土の松江市や米子市、また首都圏・関西圏で就職する。後継者不足は深刻で、特に第1次産業には最近の十数年に専門的な後継者は1人もいない。移住者が来るまで第一次産業を専業にしている者は、もっとも若い人で30代後半であった。

【過疎化対策】 整備の状況は、人口の少なさや離島という地域性を考慮すれば必ずしも低いレベルではない。過疎法だけでなく、離島振興法の適用を受け、道路・港の整備、住宅建設など公共施設の整備が重点的におこなわれてきた。また老人介護施設が全国的にも早い段階で作られ、高齢化を支えている。しかし教育施設、文化施設の整備は他の自治体に比べて立ち遅れている。地元による主体的な「村おこし」事業は、これまでおこなわれたことがなく、今回の移住者受け入れ事業が、初めて村から立ち上げられた取り組みであった。

【Iターン受け入れ制度】 知夫村でのIターン受け入れ事業は、産業振興を目的として1992年度から毎年数家族を、村からの援助を与えて受け入れようというもので、調査の時点では初年度受け入れられた5家族と翌年の2家族が暮らし始めていた。

当初の対象は、島の出身者であったが、島内へのUターンを希望する人は多くないと予想されたので、出身を限定しないまま募集をおこなった。募集のために予算を組んだ宣伝は一切おこなわなかったが、ユニークな募集であることから全国紙の記事となり、田舎暮らし向け雑誌にも掲載された。初年度は全国各地から310件の問い合わせがあり、87通の応募が集まった。その後数回の面接会を経て5家族の「定住者」を選定、移住を受け入れた。平成5年度は前年と同様の募集を行ない、22名応募者から知夫での研修と面接を経て2名の定住者が選ばれた。平成6年度以降の募集はおこなわれていない。

定住者に対しては村から1家族につき800万円分の援助がおこなわれる。この額はIターン支援としてはかなり大きいものである。援助の内容は、まず住宅の援助として、住民から借り受けた空き家を補修・改装し、月1万程度で貸し与える。生業の援助として、小型の船舶または牝牛を10年間無料で

⁷⁾高齢者率の高さ・若年者率の低さ、ともに全国でも20県にはいるほどの深刻な状態である。

⁸⁾漁業に置ける漁業権と牛の放牧に置ける入会権は、どちらも非常に簡単に手に入れることができた。一般的な農村・漁村の制度と比べて、この知夫村のシステムは人数制限も村人の承認の必要もなく、新規参入者が容易に新しく漁業や牧畜をはじめることができた。制度的には新規参入者を受け入れやすい体制になっていたのである。

貸与し、10年この島で暮らせばそのまま与えることになっている。800万円の内訳は、空き家の補修・改装費に300万円、漁船または牛の購入に500万円が用いられる。この500万円は、現物に換算すると、漁船の場合1トンの漁船1隻と0.5トンの漁船1隻になり、牛の場合、1頭約50万円として10頭前後になる。定住事業の7家族のなかでは、6家族までが漁船を選び1家族だけが牛を選んだ⁹⁾。

2-2. 山間農村の事例 ー中国山地・横田町ー

【地域概況】 次の事例は、中国山地の分水嶺に近い山間に位置する島根県仁多郡横田町である。人口8411人、世帯数2314、総面積の85%を林野が占め、耕地率は9%にとどまっている。人口は昭和30年をピークに1960年から年急激な人口減少を被ったが、世帯数は一貫して2300前後で大きな変動はない。歴史的には伝説の「ヤマタノオロチ」の舞台として有名であるとともに、古くは室町時代より山陽・山陰を結ぶ街道の中継地であり、牛馬市の開かれる町として栄えた。また良質の砂鉄の産地であり、たたら製鉄法により多くの和鉄が生産されてきた土地でもある。¹⁰⁾伝統産業は江戸時代より「雲州そろばん」の産地として全国に名声を馳せていたが、現在は需要の低迷と職人の高齢化のため斜陽となっている。

産業は農業と工業が現在中心的な産業となっている。農業は米・野菜を中心に、そのほかタバコ・花卉類の栽培がおこなわれている。野菜は冷涼な気候を利用して、平地とは時期をずらした出荷が可能である。工業では、1970年代以降に誘致された工場が、機械・アパレルなど7社あり、400人以上の雇用を支えている

住民組織としては、町内に43の自治会あり、各自治会の下部には区会が設けられている。地域清掃や運動会など多くの地域活動が区会を単位としておこなわれる。その下には数戸単位の「班」があり、よりきめ細やかな近所付き合いがみられる。葬式は班単位で互助的におこなわれる。教育機関は小学校が4校、中学校と普通科の高校が1校ずつあり、近隣の過疎町村と比較して充実している。

【過疎化対策】 横田町では、1ターン受け入れ対策以前に盛んな過疎化対策が講じられてきている。それは「過疎法関連事業」「国営農地開発と横田農業公社」「ふるさと町民会議」の3つに分けられる。

⁹⁾子供は高校進学の時点を村を離れ寮や下宿に入って高校に通うことになり、卒業後、就職の段階になるとほとんど村に戻らない原因のひとつになっている。

¹⁰⁾これらの援助は、漁船の場合、沿岸でのサザエ漁をおこなうこと自体に支障はない。しかし地元の漁師の多くは、より効率的に漁をするために魚群探知機や小型船外機などより多くの設備を持っており、装備面での格差がある。牛の場合は、子牛の売却益だけでは生計が危ないレベルにある。事業立案時点では、1頭50万円、1年間に10頭の子牛を生む計算で500万円の売り上げが上がることを見込んでいたが、その後牛肉国際化の余波を受け、子牛の価格が暴落してしまった。現在は1頭20万円を割る水準であり、世帯家計の維持が困難になっている。

過疎法関連事業については、1970年の最初の過疎法「過疎地域対策緊急措置法」から過疎地域として指定を受け、これまで30年以上にわたって、過疎地域振興事業による活性化が展開されてきた。これらによって国道・農道が整備され、けわしい峠には観光施設を伴ったループ橋が作られた。町民センターや町役場も新設され、文化施設も充実した。そのほか上水道など生活基盤の整備・そして観光レクリエーション施設の拡充などの点で大きな成果をあげた。

「国営農地開発パイロット事業」は農業生産の増加と農業経営規模の拡大、自立安定農家を育成を目的として、1972年から開拓事業がスタートし、1995年全工期を終了した。結果、375haの農地が造成されたが、開拓地は十分に利用されていないのが現状である。375haのうち商品的な作物は全体の30%程度しか作付けされていない¹¹⁾。

80年代の後半から町民主体の活動として活発に展開されたのが、「横田町ふるさと町民会議」である。立ち上げは県の施策「まちむら活性化対策事業」の指導によるもので、事業費は過疎債を中心に進められた。地域住民による組織として活発な活動を展開して、主体となったのは、それまでも盛んに活動していた青年会の人材であった。その成果として、町全体の祭りである「おろちの火祭り」の創始、伝統工芸であるそろばんの理解を深めてもらう施設「そろばん歴史館」、たたら製鉄の歴史と文化を集結させた「たたら・刀剣博物館」、そして兵庫県尼崎市との住民交流や同市でのアンテナショップの開店などが、短期間のうちに告ぎ継ぐと実現されていった。しかし現在、ふるさと町民会議の活動は停滞している。当初の目標達成した後に次の目標が見出せなかったことや、また若い世代の積極的な参加がなかったこと、住民と行政の連携がうまく機能しなくなったことなどが理由であった。そして数々の観光施設は、完成直後こそ周囲の注目を浴び、大勢の観光客の呼び込みに成功したが、その後、時とともに入り込み客は漸減しつつある。

このような数々の活動の結果、横田町では知夫村とは比較にならないほどの観光・文化施設を設置するにいたった。しかし依然として人口の減少は続いており、現在そして将来の過疎化進行に対して、根本的な対策とはなりえていない。またこれらの成果への町内からの批判も少なくはなく、施設やイベントが町の中心部に偏ってしまったために、町周辺部の住民からは不公平を訴える声が出ている。

【Iターン受け入れ制度】 こうした活性化策の行き詰まりに対して登場したのが、Iターン受け入れ支援策である。横田町でのIターン支援は、「工芸家の誘致」と「農業インターン受け入れ」という二つの形で進められている。

工芸家の誘致は、平成4年から始まった横田町活性化企画「奥出雲手づくり村構想」の一部として

¹¹⁾横田町は現在全国でたたら製鉄がおこなわれている唯一の町である。各農家あたりの配分面積が小さい上に何カ所かの山に分割されて場合があり、効率的な利用ができない。また開削後間もないため地力が弱い。所有者の兼業化・高齢化によって十分な営農が行えないなどの問題点がある。

進められた。それは知夫村の例とは異なり、誘致に際しての援助はほとんどおこなわれていない。優遇制度としては、移住に際しての空き家の斡旋・大家との交渉などがある程度であった。移住の第1号は、染色工芸家の一家3人で彼らの移住を皮切りに次々と工芸家が村へ入ってきた。現在、工芸家として移住してきた人々は14組を数え、家族も含めると20人以上となる。

もうひとつの移住者受け入れとして「農業インターン制度」がある。これは、減少している若い農業担い手を育成するとともに、横田町で開拓された国営農地の利用を促進するもので、現在8人が国営農地の一部およそ5haの農場で、タバコ・キャベツ・ホウレンソウ・花卉・水稻などの耕作実習をおこなっている。今後は3年の実習期間修了者で農業法人を設立し、続く修了者を受け入れながら拡大し、法人として独立採算で経営・耕作・インターン受け入れ・実習等を行っていく予定である。研修生には、県と町から月15万円の援助金が貸与され、研修後町内に残って農業を続ける場合、返還は免除される。

また工芸家・農業インターン生以外にも、数家族がIターン移住者が訪れている。翻訳家の夫婦、オートキャンプ場を経営する人などが都市からやってきて暮らしている。こうして過疎地域としては比較的多くのIターン移住者を受け入れているものの、横田町全体としてみると人口減少に対して移住の規模は小さく、過疎化の人口減少を食い止めるまでにいたっていない。

横田町の場合特筆すべきは、「工芸家受け入れ」事業について、移住時点での援助が少ないという点である。この場合、知夫村であったような住宅補助や援助金の金銭的な援助は一切おこなわれていない。その分、移住の前後にわたる支援体制には他の自治体以上に力を注いでいる。移住前には、空き家を斡旋し、先輩移住者を紹介する。また実際の移住地を決定する時にも、行政を仲介として地元住民とIターン者の調整をおこなうようにしている。

2-3. 「受け入れにいたるまで」の比較

過疎化の状況は二つの地域で大きく異なっている。知夫村は人口規模の非常に小さい離島であり、高齢化率が高く、若年者率が低いという深刻な人口問題と抱えている。産業的に今後の大きな伸びを期待できるものはなく、観光資源・文化資源にも乏しい。村外との交通がすべて船であるため移動に時間がかかり、天候によっては本土との連絡が完全に途絶されることがある。一方の横田町は、人口規模は、知夫村の約10倍で近隣の町村の中でも大きな部類に入り、商業施設、文化施設などがある程度整っている。人口は、自然減の状態とはいえ、町にはいくつかの工場や高校もあり、十代から30代の若い世代が多く住んでいる。交通面も整備されており、広い国道・県道のおかげで町外との行き来に大きな不便は感じられない。また伝統文化の面でもヤマタノオロチ伝説やたたら製鉄、そろばん産業など誇るべきものが数多くある。

過疎対策史については、この二町村はまったく対照的であった。知夫村においては過疎問題の深刻
Kyoto Journal of Sociology VII / December 1999

さは反比例するかのように、ほとんど活動がなされず、逆に横田町で活発な町おこし運動・開発事業が展開されていた。この違いの原因としては、県中央部からの距離や、観光資源・伝統文化の有無、活動的に町おこしを進める人材などいくつかの要素が関係しているものと思われる。

次に両者の受け入れ制度を比較すると、同じ移住者支援でもまったく違う方針のもとで援助がおこなわれていることが分かる。独自の活性化策においてこの取り組みが初めてという知夫村では、人口増加はもちろん、そこには村内の産業振興を目的までもが視野に収められている。単なる頭数としてではなく、漁業・牧畜業の担い手としての住民の育成することが重要な課題のひとつであった。そのため支援事業の重点も、漁師、牛飼いとして地域に根付くための生業手段の支援に置かれた。そこには良き住民であることだけでなく、よき産業の担い手であることへの期待が込められていたのである。

一方の横田町では、Iターン受け入れに対してかける意気込みは、知夫村ほど熱くはなかった。産業の振興は既に工場誘致や農地開発で支えられており、また人口の増加については、もとより移住者受け入れだけでは人口の規模から言って急激な人口増加を望むことは難しい。横田町にとってのIターン受け入れとは、産業や人口を支える意味は薄かったのである。そこでは、地方文化を豊かにし、住民が楽しく暮らすための潤滑剤、活性化のきっかけとしての役割こそが重要であり、移住者の支援においては、どの生業につくかという問題より地域にスムーズに定着することが課題となっていた。そこで住民感情にも配慮し、なるべく不公平感を抱かせないような受け入れ態勢が必要と考えられ、その結果、受け入れ支援としては珍しく、金銭的な援助ではなく、長期的に住み続けることができるようなソフトで継続的な支援体制ができあがったのである。

この違いは、過疎化の深刻さやこれまでの過疎対策の状況の違いによって表れてきたものと考えられる。知夫村においてのIターン受け入れは、産業の衰退、資源の貧困、人材不足、加速する高齢化など八方ふさがりの状態において、他のさまざまな活性化戦略を実行することなく、選択された苦肉の策であった。何もできない状況下での、ほとんど唯一の可能性として外部の人材を呼びこむ戦略が取られたのである。一方の横田町では、基盤整備・農地開拓・町民による町おこしと、これまでの活性化の典型のように数々の事業を手がけた上で、Iターン事業への取り組みが始まった。つまりできるかぎりの全ての策を出し尽くした結果として、最後の選択が新たに外部の人々を呼びこむことがあったのである。

3. 移住者の生活 一事例分析から

では、それぞれの地域において、移住者は実際にどのような暮らしをしているのであろうか。実際の移住者の生活の各場面をみながら、移住者・地元住民・行政それぞれの相互作用の様相とその背景を分析していきたい。

3-1. 離島漁村での1ターン移住者たち

移住者	年齢	家族構成	動機	生業
A	31	夫婦・子供3人	サラリーマン生活への不満・自然への憧	漁業(サザエ・アワビ)
B	47	夫婦・子供1人	都市での住生活・人間関係	渡船
C	33	夫婦・子供1人	環境問題・子供のアルバイト・自給自足志	漁業(刺し網)
D	31	夫婦	都市での職業	畜産(牛の放牧)
E	29	夫婦・子供1人	職業の不振・釣り好	漁業(ハマチ養殖)

【地域社会の中で】 まず最初に、移住第1号で漁師をしているA氏の出来事を取り上げる。A氏は、漁港のある区の集合住宅に暮らしている。もともと人づきあいが得意な方ではなかったが、田舎では近所付き合いが大切だということは移住前から聞いていたので、区の集会や清掃などの共同作業はきちんと顔を出すように心がけている。近所の人々とは移住直後から交流をしており、道で会う人ごとに挨拶を交わし、その全員がわかるようになった。近所の人があまった野菜などを「おすそわけ」で持ってきてくれたということもあった。まわりが皆顔見知りであるという安心感を得るようになった。この安心感は、以前の都市での生活にはなかったものであり、とても新鮮でうれしく思ったという。A氏夫妻によると、

A1「この島に来て、最初にびっくりしたのは、そう、ここじゃなあ車を停めとくときにキーを付けっ放しにしとくんだぞ。こんなこと街じゃ絶対できないぞ。」 「だいたいここで車盗ってもどこにも持っていけないだろ。それより、もし邪魔になったとき動かせたほうがいいだろ。」

A2「夕方、家に帰ると、玄関のところに、野菜がビニール袋いっぱいに入れて置いてあったり、煮付けとかお漬物とかが置いてあるんですよ。みんな気にかけてくれてるのがわかって、すごくありがたかったですね。来てすぐの頃でしたから、ここに来てよかったって思いました。」

彼らにとってこのような隠し立てのない生活を送れることは、とても好感が持てることであった。しかし近所の人々の親切は、ありがたい反面一方的で、慣れないために多少とまどいもあった。

A2「最初の頃は一体誰が持ってきてくれたのか、わからなくて、本人に言われて気付いたこともありました。 … お返ししようにも、サザエとかはそんなに採れないし、畑も始めたばかりでなんにもならないですしねー。お礼の挨拶ぐらいいいかできなくて困りました。もう今は慣れましたけど、めんどくさいなって思ったこともありましたね。」

A氏夫妻にとって安心感の源は、同時にこのようなわずらわしさ、息苦しさの源ともなっていたのである。

一方、2年目の受け入れで移ってきたE氏も、島の人々と打ち解けていくことを喜びながら、とまどいも同時に感じていた。

E「この人は家に鍵かけると怒ってね、『このもんが信用できんのか』とか言って。やっぱり最初はびっくりしたね。ノックもせずに、いきなりカバーってそこのドアあけて、『来たぞー』って。うちはそこのドアのところに風呂あるから、うちのカミさんなんか裸見られたりしてねー。…最初はちょっとやな気したよ。この島はプライバシーもなんもないんかって思ったけど、俺みたいな新参もんにいろいろ世話焼いてくれとるし、断るわけにはいかんしねー。…まあでも、そういうもんだと思ったら、だいぶ慣れたし、気にせんなら気にせんでもいいかっていう風になってきたね。」

E氏にとって、あけっぴろげでプライバシーが守れない島のつきあい方は、はじめ不快であったようだった。しかしその不快感を乗り越えることは、E氏にとって難しいことではなかったらしく、次第に島の暮らしに馴染み、適応していくことができた。

これらを見てみるとムラの都市化・近代化が進んだとはいえは、依然、過疎地域では直接的接触が頻繁におこなわれており、互いに打ち解けた気楽な態度でのコミュニケーションが基本になっている。上記のような生活の公的・私的領域の境界があいまいで成員同士が生活へ深く干渉しあっている生活は、都市にないものであり、都市の個人主義的な生活態度からみると安心感や新鮮さを感じたり、逆に葛藤や息苦しさを生じたりするのである。

【移住者の変化】 移住者は、移住当初の志向や動機を移住後も変わらず抱き続けるというわけではない。それは過疎地域の生活の中で変化し揺らいでいる。A氏の場合、1回目の聞き取りの際は、環境が破壊されることやリゾート開発については反対の立場に立っていた。しかし、2回目の聞き取りの際は、実際の過疎地域の姿を目のあたりにして、地域の活性化が非常に切実な課題であると考えようになっていた。特に深刻と感じたのは小中学校の生徒数の問題である。自分自身の暮らしは漁を続けていくかぎり、多少地域が衰退しようとも問題ではないが、子供の教育を考える場合、人口が減り生徒数が減少し学校そのものがなくなるといふ事態は避けたい。そして、そのためには地域の活性化は必要であり、リゾート開発や多少の環境の悪化も止むを得ないと考えるようになっていた。

C氏の場合は、移住時の志向が究極的には自給自足を目指すもので開発や発展には否定的であった。C氏の目指す自給自足の生活は、生活で必要なすべての物を自分たちで作り出す生活のことであるが、聞き取りの時点では、家庭で消費する野菜を自家無農薬栽培でまかなうことが中心であった。自給自足の生活に不足しがちな現金収入については漁と妻のパート収入でまかなえると楽観的に考えていた。しかし島での生活は、耐久財や漁業用具など予想以上に出費が多く、また漁船の座礁事故があったため修理費の支出も大きな負担となった。そのためにC氏は現金収入の道として、魚介類の産地直売を手がけるようになった。しかし産直方式は自給自足の考え方より、むしろ逆に都市との結びつきを強め、島の発展・活性化を志向する動きである。C氏は都市を嫌悪し自給自足を目指していたにもかかわらず、実際の生活の必要性から皮肉にも都市への依存を強めていくこととなったのである。

このように移住者たちは、様々な葛藤や圧力を経験し多くの変容を遂げながら、過疎地域に生活し続けている。そしてその変容の経験こそが「移住者」を「住民」へと変えていくのである

【移住者と地元住民】 知夫村では、移住者に対して、地元の人々はどのように反応しているのだろうか。ここではIターン移住者たちは、「定住者」と呼ばれていたが、そのレッテルはなかなかぬ拭い去ることができず、さまざまな行動が「移住者」という視点で捉えられていた。そしてある一人の移住者の行動は、すぐに他の移住者と結びつけて考えられた。

例えば、移住者の一人が、移住当初、漁がうまくできなかったので島の土木業者で働くことになったが、遅刻が多かったり休みがちであったりと、勤労態度が良くなかったため解雇されてしまった。このことから島の人々は移住者全体に対して「移住者は怠け者で、休みに島にきているだけだ」と同じ評価を持つようになった。ようやく評価が好転したのは、移住者の中でも非常に熱心に働いていたA氏が、1年以上たって平均的なサザエ漁師以上の収穫をあげるようになってからであった。しかし、それに伴って一部の漁師から「移住者がたくさんとるとワシらの分がなくなる」という拒絶反応が現れてきた。一人の移住者漁師の努力の成果が、移住者全体の拒絶に発展し、結局3年目以降の移住者の受け入れが中止されてしまったのである。

また知夫村の場合、移住者が起こそうとする新しい活動のほとんどが、ことごとく島の住民の反対にあって断念させられていた。A氏については、個人で秘密裏に地域活性化のプランを練っており、島の特産品開発、イメージキャラクターづくりとその商品化などいろいろな企画案を考えだしていた。しかし結局この企画案は、島の人々に相談した時点で反対され実現しなかった。またB氏も、釣客相手の渡船や諸島連絡船などを運行させる計画をはじめ、その他さまざまな活性化のプランを進めようとしていたが、島の人々のごく一部が興味を示したに過ぎず、大部分の保守的な姿勢を覆すにはいたっていない。C氏は、かつての知人・同僚などのコネを利用し、都市の住民を相手に自分の採った魚介類を産地直売方式で直接販売していたことがあった。しかし販売方式に関して温度管理がずさんで購買者からクレームがついたことから島の住民が島のイメージダウンだと反対し、中止することになった。

このように地元の住民の側が保守的で、新しい活動に関して応援するどころか、まったく許容されることがなかった。移住者は、島民と同じであることが求められ、移住者の都市的な生活様式や態度、新しい取り組みは許される余地のないものだったのである。

3-2. 山間農村でのIターン移住者たち

移住者	年齢	家族構成	動機	生業
W	31	夫婦	書類ではなく、手応えのある生活	農業研修生
X	35	夫婦・子供3人	都市（東京）での職業・人間関係	自然酵母パン製造
Y	42	夫婦・子供1人	アトリエの確保・自然環境	染色家
Z	41	夫婦	自然環境・無農薬食材	翻訳・ネイティブアメリカン工芸

【地域社会のなかで】 夫婦2人で移住した農業インターンのWさん（男性20代）は、区の人々から大変な歓迎を持って迎え入れられた。移住後の1週間は、ほぼ毎日歓迎会が開かれ、時には自宅、時には区の集会所、時には近所の人の家と、連日酒とご馳走の日々が続いた。その後も、夜になると毎日のように近所の誰かが顔をのぞかせ、最初は、町の人々の歓迎がとてありがたいと感謝さえしていたWさん夫妻も、この連日の歓待の嵐には、かなり戸惑っていた。

W「確かに、いろいろと親切にしてくれるのはありがたいですけど、やっぱり何か違うんですね。 …

暇なのかどうか知らないけど、ほんと毎日毎日、いろんな人が来ましたよ。最近減ったけど、やっぱりよー来てるよなあ。 … こっちが仕事で疲れてて、ゆっくりしたいってときにも、来られると相手せんといかんしな。気が休まるときがないんですよ。 … プライバシーなんてもんはないだらなあ。」

このようにEさんは、町の人々の近所付き合いにかなり消耗しているおり、移住後かなり早い時期から家を変えることを考えはじめ、3ヶ月ほどで町内の別の地区に引っ越すことになった。

移住者のX夫妻も、近所付き合いに対して困惑の表情をのぞかせていた。

X1「ほんと7月から9月ぐらいまで、ほとんどの日曜日が行事で埋まったりするもんね。ここの人って、家族でどっか行くってことがあんまりないみたい…。…毎週のように行事入れても、それが当たり前だって言うもんね。」

X2「そうそう、なんかみんなでするのが当然で、自分たちが勝手にすることがないみたいなのよ。」

X1「僕としてはやっぱり草刈りとか掃除とか、ここに住むものとしてやるべきことはするつもりはあるけど、ほかのさ、ソフトボールとか、運動会とか、そういうのはべつに全員出なくてもいいでしょ。でもここの人は出なくちゃだめなんだよ。」

X2「そういうのおかしいと思わない？ 個人の自由でしょ、運動会出る出ないなんて。そういう基本的なところから違うんだよね。」

X1「そう、みんな一緒っていうのが当たり前で、違うことはしたらダメだし、しようと思わない。」

このX氏夫妻は子育てに関しても、地域の人々とは違和感を感じていた。X氏たちの方針は、すべ

て子供の自主性に任せるというもので、子供のすることに対してほとんど干渉しないことにしていた。このことが地元の人たちには受け入れられず、子育てについて話し合う相手はいなかった。

しかしパンの販売を通じて、近隣の市町村の人に接するようになってから、次第にその方針に理解を示してくれる人たちに会えるようになった。そして松江市にある子育てサークルの存在を知り、今ではその一員として活発に活動している。地元では受け入れられなかったものの、地域を越えた理解者を得ることができたのである。

【移住者の変化】 横田町の移住者についても、知夫村と同様に志向や考え方の変化があらわれてきている。その1つが、地域との距離感の問題である。工芸家のYさんは過疎地域での生活や地域活動の感想として、周囲の反響の大きさや自分たちが地域の中でできることの大きさがわかったという。

Y「僕音楽もやっててね音楽家に知り合いがいるんだよ。それをこの前オートキャンプ場に呼んで演奏会を開いたら、結構人が集まってね。…なんか不思議な感じがしてさ…。あんたも都会で暮らしたならわかるだろうけど、僕らがなんかやっても、なんにも変えないでしょ。特に政治というか、役所なんか動かないでしょ。でもここは違うんだな。…町が小さい分、人がおおきいっていうか。…僕らがやったことで、町が動くからねえ。町がすごい身近にあるって感じがするんだよねえ。」

「役場の人とかと飲んだりして、愚痴とかいっているうちに、その愚痴がほんとになったりするんだよ。あれはびっくりしたね。でもちょっとしたアイデアが、あつという間に実現することもあれば、がんばっても結局つぶされることもあるしね。…最近、政治離れとか言ってるでしょ、そういうのはこういう田舎から変えていけると思うよ。うまくやれば、ほんと、冗談じゃなくて…。田舎だからこそ、がらっと変わるんだよ。」

このように移住者自身、生活の中から自分の暮らす地域社会との関係を再認識するようになったのである。

【移住者と地元住民】 横田町で地元住民は、移住者をどのように位置づけ、反応しているのだろうか。先の移住者Eさん夫妻が、毎晩の歓迎に困惑していた件に関して、地元住民の一人が次のように答えていた。

——この地区は、特に歓迎が強烈みたいですけど、やっぱりめでたいことなんですか？

町民1「そりゃ、そーだわな。だいたいこぎゃん田舎に来てくれるちゅーのが、すごいがね。だけん、お祝いせな。…やっぱし、みんなで仲よくやっていかないけんけんねえ。」

町民1「あとやっぱし、どげしちゅーか（どうしているか）心配だがね。こんな田舎に来て、どげにしちゃうだーかなって…。だけん、様子を見—ためもあるかもしれんなあ、野菜持って行ってあげ—時には…。」

ここから移住者への期待が見えてくる。彼らにとって新住民の誕生は祝うべきめでたいことであるが、その歓迎のかなたにはみんなが「仲よく」することが期待されている。また、新住民がどうして

いるかという親切と配慮の心理は、何か苦勞や悩みを抱えていないかという心配の気持ちでもある半面、一体どんな暮らしぶりなのか、おかしなことをしていないか、と、「様子を見」る監視の意味も含まれていると考えられる。これは知夫村のように異分子を排除するのではなく、同じ「住民」として自分たちの輪に引き込もうとする過程であり、そこには周囲との協調を重んじ、相互に監視する目が光っている。

しかし横田町では、必ずしも地元住民の意向だけが地域生活の鍵を握るのではない。移住者が移住の時点で、前もって区会活動や葬式互助などの地域社会への参加の度合いを、地元住民と取り決めをおこなうのである。それは町の受け入れ策の一環として、役場担当者の仲介でおこなわれるもので、新住民が地域へ参加するスタンスを調整するためにおこなわれていた。

例えば、バン屋として家族5人で移住してきたXさん一家は変則的な参加の仕方を選んでいる。生業が客商売なので積極的に地域に加わりたいという意向で、区会には全面的に参加することになった。しかし「班」単位でおこなわれる葬式の互助だけは、参加することを見合わせた。大人二人の人手を2～3日間拘束される互助は、核家族でしかもバン屋の営業をしているXさんにはあまりにも重荷であったからである。

翻訳業をしているZさん夫妻は、区会活動への参加を完全に断った。もともと地域のしがらみのようなものが苦手だったので、移住先の空き家を探す際に区会への不参加が認められる地区という条件を提示していた。移住後は実際に役場担当者の立ち会いのもと、区会長との話し合いを持ち、正式に不参加を確認しあった。しかしながら実生活において、まったく交流がないというわけではなく、隣家からあまった野菜をもらったり、英会話教室を開いたり、区の運動会に参加したりと盛んに地域に交わっている。

このように区会の参加の仕方については、区会と移住者の間にきちんとした交渉の場が設けられており、移住者の意向をかなり細かい部分まで反映することが可能となっている。これは地域活動への参加のスタンスを、移住者がある程度主体的に決定することができるということである。つまり、区会への入会という社会生活において重要な部分に関して、移住者の意向を汲み上げ、地元住民との均衡化が図られているのである。

また横田町では彼らをただ受け入れるだけではなく、地域の中でより積極的に活用する動きも見られた。その例として、工芸教室の開催があげられる。これは年に2回移住者の工芸家が数人ずつで講師となり、工芸品の作製を指導しているもので、これまでの教室は、陶芸をはじめ、組木細工づくり、ガラス工芸、ジュエリーづくり、金属加工などさまざまな分野でおこなわれた。カルチャースクールより本格的にプロから指導が受けられると好評で、受講の申し込みは町内はもちろん町外や県外からも集まる。一般の展覧会や実演販売会以上に、工芸という文化を浸透させることに貢献しているようである。夏休みの陶芸教室に来ている人によると以下のような答えが見られた。

—「何がきっかけでこれに來たんですか？」

町民2（男性・50代）「もともと陶芸は見るのが好きだったけど、自分で作ったことはなくてね。だいぶ前に新聞か何かでこの教室が載っててね。妻と一緒に來たら、もう面白くてね、もう毎回受けてるよ。先生も親切に教えてくれるしねえ…」

町民3（女性・60代）「私、（隣の）大東町で陶芸クラブに入ってるんですけど、（手でこねる）てびねりしかできなくてね…。でもここに來たらろくろが使えるでしょ。」

このようにクラフトビレッジや工芸教室を通して、多くの人が陶芸等の工芸に親しんでおり、手づくりの町としての工芸文化振興は確実に進んでいた。工芸家個人としてもこのイベントを通して、知り合いになり、その後も交流が続いている例もあった。また、工芸家の中には、逆に普段から積極的に近所付き合いや住民活動に加わって、そこでの人脈を活かして、作品を数多く売ることができるようになったという人もいた。

【新しい活動】 さらに横田町の移住者は地域の交流だけでなく、これまで都市ではできなかったような新しい活動を次々と展開している。その例が工芸家の移住者たちの共同展示会である。97年春、移住第一号のY氏の提案から5人の工芸家が集まって、酒をテーマにしたそれぞれの分野の作品を制作することになった。展示会は「酒にまつわる器展」と題され、町内のギャラリーで陶器・ガラス器、その他テーブルクロスなどさまざまな工芸品が展示された。この展示会は「Iターン移住者」たちの活動として注目を浴び、さらに町内を出て松江市内の酒屋で展示会が開かれることとなった。

これは移住者が自律的に活動できた成果であるとともに、過疎地域からの情報発信の可能性を示唆するものである。そしてIターン移住者というレッテルが周囲の注目を浴びる要因になりうることを示す事例でもある。

3-3. 「移住者の生活」の比較

こうして二つの地域でIターン移住者の生活を見てみると、ある面では同じような場面が見られるものの、まったく対照的な状況も見られる。

似た状況が見られたのは近所付き合いに関する場面であった。知夫村ではA氏夫妻やE氏の事例で、暖かなふれあいに安心や新鮮さを感じながらも公私の隔てのなさにとまどいを覚えてるということが見られた。同様に横田町でもW氏やX氏夫妻が、親切やふれあいの良さを評価しながらも監視や同化の視線に疲れるという事例があった。これら移住者と住民の葛藤の根底には、都市と過疎地域の間の生活様式や人間関係のあり方の違いに関するカルチャーギャップがあると思われる。知夫村の2人や横田町のW氏の場合には、地域社会の協調性や相互干渉の程度が都市と過疎地域で異なることからストレスが生じていた。またX氏夫妻の場合、守るべきとされているのは、夫婦のプライバシーであり、

個人でのんびりとできる時間である。これらは個人的な空間、時間の領域を確保しようとする志向、つまり個人主義的な志向の現れであると言える。一方、地元地域には、個人的な領域を守ることよりも、周囲との協調を重視するという価値観が根付いている。お裾分けの親切や心配という名の監視は、自分たちの共同の輪に引き込もうとする過程であり、そこには周囲との協調を重んじる相互監視の目が光っている。ここに住民側の志向として周囲との協調・共同性の尊重という面が現れている。これらの住民と移住者の志向の違いが両地域で同じように見られたということは、地域の違いを越えて都市と過疎地域の全般において、住民の志向に違いがあるということである。

次に、二つの地域で対照的な点として特に注目すべきは、移住者の異質性に関する場面である。知夫村では、移住者が何か新しいことを始めようとしたことはことごとく拒絶され、原則的に地元住民と同じように生活することが求められていた。一方、横田町では工芸家の技術を評価されて地域の文化活動に活用されたり、まったく新しい展示会の開催を成功させていたり、かなり自由な活動を繰り広げていた。

この違いを考えると、知夫村での移住者生活では、何よりもまず島の住民が優先されていたことがあげられる。地元住民の意向のために移住者の行動が制限されて、移住者には、自らの生活をコントロールすることすら難しい。いわば島の住民の手によって移住者の生活が作り上げられているといっても過言ではない。この状態は、いうなれば社会生活において移住者と地元住民の均衡が崩れている状態であり、まさに自律性を奪われて生活に対してのイニシアティブを失うまでにいたっているのである。

一方、横田町では、地元住民の監視の目が光っているもの、そこには一方的な排除や周縁化の構図は見られない。移住開始の時点から移住者側の意向をくみ取る制度があり、区会活動という重要な要素を自律的に決定することが可能であった。またそのほかの活動でも、移住者に積極的な評価を与え彼らの新しい文化を楽しむ場面が見られた。これはごく一部であっても移住者の方が影響を与えることのできた事例であり、知夫村には見られなかった特徴である。

そして移住者が自律的に活動できた成果である「新しい活動」の事例では、過疎地域からも情報発信が可能であるということを示すとともに、文化・情報の面で不利な過疎地域においては、都市から専門的知識・先端文化を持ち込んでくる移住者が、情報発信の起点となりやすいということも示している。

4. 考察 ——地域のダイナミズム——

都会の人々が移住し、田舎で暮らすという同一の事例でも、さまざまな場面が展開されている。この違いは、それは移住者のもつ都市生活者としての性質や個人的な条件によるものというより、受け入れる側の地域社会の特性や地元住民の対応によって大きく左右されている。

受け入れる地域がIターン者たちに求める役割は、単なる頭数としてだけではなく、地場産業の担い手や、地域自体を支える人として、あるいは地域に刺激を与える者として、地域に暮らすことが求められている。期待のかけ方は過疎地域だからといって一様であるわけではなく、地域によっては多くの役割を求めたり、ある一定のものだけに期待をかけたりしている。知夫村では人口を支えると同時に地域の産業を担う役割を求められていた。一方の横田町では人口や産業を支えるものではなく、新たな文化を招き入れることが期待されていた。

この違いは、地域の過疎化の状況やこれまでの活性化対策などによって左右されていると考えられる。知夫村のようにほとんど活性化の対策を講じてこなかった上に、非常に深刻な過疎状況にあるとなれば、Iターン受け入れ事業と移住者に大きな期待がかけられるのも当然である。過疎地域にしてみれば、行政の施策として何らかの援助のもとに受け入れる限り、ある程度の役割期待をするのは当然ともいえ、さらに大きな援助を授ければ、大きい期待をかけることが許されると考えるのも、十分理解できる。しかしIターン者にとってしてみれば、かけられる期待が大きき、多くの役割を求められるほど、それを束縛とを感じるようになり、自立的な生活が送りにくくなる。また一方では大きな援助が地元住民に不公平感を生じさせ、その感情が移住者の立場を悪くしているという点もある。つまり一見、Iターン移住の支援になると思われる金銭的に大きな援助は、かえってIターン移住者に重圧を与えたり、地元住民からの反発を招き、移住自体を不成功にいたらしめる要因となりうるのである。

実際、援助が大きく、さまざまな意味で村のためになることを求められてきた知夫島の移住者は、住民からさまざまな重圧を受け、なかなか自立的な生活を送ることができない状況にある。一方、横田町の方は援助が小さい分、行政や住民としても大きな役割を期待できず、移住者は知夫村ほどにプレッシャーを感じることなく、自律的な生活を送ることができている。

ただし役割の期待がすべて束縛となり、移住者の生活からイニシアティブを奪っていると考えるのは性急である。横田町の移住者が自ら展示会を開き、マスコミや行政に注目されたということは、移住者が周りと異なっていることを逆手に取った成功例である。すなわち特別な人としてその役割期待や監視に縛られるのではなく、それを自らのアイデンティティとして引き受け、主体的、積極的に打ち出していくという選択である。これは移住者が周りから排除されるという異化・周縁化の構図を、逆に利用した行為と言える。これまで周縁化といえ、中心から一方的に価値付けられ主体性を剥奪されたものと考えられてきた。しかしここでは周縁という位置づけを武器にイニシアティブを取り戻そうとしているのである。

この逆転の作用は、中心部の地元住民にとっても単なる反逆ではない。確かに知夫村での移住者の新しいアイデアや活動は地元住民によってことごとくつぶされてきたが、横田町の工芸家たちは、住民にとって興味深いものとして受け入れられている。住民にとって移住者がもたらす都市の文化は、自文化を脅かすものではなく、面白く刺激的なものとして歓迎されているのである。

これは移住者と地元住民が、地域生活を生きる中で互いに差異と共同性を積極的に活用していきうとする働きかけである。そこには知夫村の周縁化と排除の事例のような共同性と個性を巡る緊張ではなく、共同性と差異を使い分ける余裕のある、いわばふれあいと刺激の相互作用の過程がある¹²⁾。このような相互にゆとりを持ち、認め合っていく関係はのためには、地域社会において地元住民と移住者が互いの共同性と差異をめぐる駆け引きで、いかにうまくバランスをとっていくかということが重要なのである。

ここから考えられるのは、Iターン移住がこれまで考えられてきたようなIターン移住者の側だけが努力し覚悟をすればよいという問題ではなく、地域全体を巻き込んで相互作用していく過程であるということである。そしてIターン移住をめぐる地域生活を構成する要素としては、地域住民の意識や態度が非常に大きなウェイトを占めており、それは当事者やこれまでの研究者が想像した以上に重要な意味を持っていると考えられる。すなわちIターンとは、Iターン移住者にとってのライフスタイルの変革としてだけでなく、同時に地元住民にとっても生活スタイルの変革を含むダイナミックな営みなのである。

おわりに

Iターン移住者は、地域活性化に非常に重要な意義を持つ者である。横田町の移住者の事例に示されているように、都会とのコネクション、情報の発信源、新しい文化の担い手として、大変重要な人材である。過疎地域の地域資源や地元で根付いた人の人材特性に加えて、移住者の持つ都市的資源をうまく活用することができれば、より効果的な活性化の力となる。相互の協力がうまく行われるのなら、移住者を活かした活性化の施策は、それまでの活性化に対して一段と深みと広がりを持ちえるものであり、都市と過疎地域のより良い関係を作り上げることも期待できる。そしてこのIターン移住を含んだ地域の分析・研究によってさらに地域の姿を追及していくことは、「地域に暮らす」ことに新しい姿を提示してくれる可能性を秘めているのである。

しかしIターン移住者の地域生活は多くの苦難に満ちている。過疎の暮らしが都市に近づいたといってもその差はいまだ大きく、思わぬ苦しみ味わうことが数多く見られる。これは単に移住者の心構えや認識不足の問題ではなかった。しかしこれまでではIターン移住が、都市住民のちょっと変わった志向として取り上げられることが多く、アウトドアライフの延長を味わうかのような軽い動機活動として扱われてきた。五全総の「多自然居住」という施策は、まさにそのような都市住民の軽いニーズ・ライフスタイルのみに着目している。しかしこれまで見てきたように、彼らの求めるライフスタ

¹²⁾この相互作用に関する議論は、「『離都向村』の社会学 ―Iターンに見る過疎地域と都市の相互作用―」『ソシオロジ』137号 2000年掲載予定、に詳述する。

イルの実現には過疎地域とその住民の意向が大きな影響力を持っている。もはや田舎暮らしは、都市からの志向の問題でなく、受け入れる地域社会を含めたダイナミックな現象として、地域住民のゆとりとバランス感覚が試されているのである。つまりIターン移住による「田舎暮らし」は、地元住民にとって見れば、過疎の中に断片的な「都会暮らし」を持ち込むものであり、相互にふれあいと刺激を与えていく現象なのである。

参考文献

- ニコラス・トーマス 「美しきものと呪われたもの—植民地文化における太平洋の構築」 中川理訳 『オセアニア・オリエンタリズム』 春日直樹編 世界思想社 1999
- 赤坂憲雄 「異人論序説」 筑摩書房 1992
- 秋津元輝 「農業生活とネットワーク：つきあいの視点から」 お茶の水書房 1998
- 蘭由岐子 「地方人口の向都離村現象」 『都市移住の社会学』 世界思想社 1994
- 蘭信三 「都市移住者の人口還流」 『都市移住の社会学』 世界思想社 1994
- 今井幸彦 「日本の過疎地帯」 岩波書店 1968
- 過疎地域活性化対策研究会編 「過疎地域活性化ハンドブック」 ぎょうせい 1993
- 国土庁地方振興局過疎対策室 「平成九年度版過疎対策の現況」 1998
- 指田志恵子 「過疎を逆手にとる」 あけび書房 1984
- 菅康弘 「新・田舎人 脱都市・田舎移住の社会学」 『社会をみる12の窓』 学術図書出版界 1995
- 鳥越浩之 「地域自治会の研究」 ミネルヴァ書房 1994
- 保母武彦 「内発的發展論と日本の農山村」 岩波書店 1996
- 本田牧子 「U・Iターンに関する調査研究」 『LDIレポート』 vol.80ライフデザイン研究所 1997
- 本田牧子 「U・Iターンに関する調査研究(2)」 『LDIレポート』 vol.91ライフデザイン研究所 1998
- 松本通晴・丸木恵祐編 『都市移住の社会学』 世界思想社 1994
- 満田久義 「価値転換としてのネオ・ルーラリズム」 『村落社会体系論』 ミネルヴァ書房 1987
- 山本 努 「現代過疎問題の研究」 恒星社厚生閣 1996
- 中国四国農政局横田開拓建設事務所 「豊潤なる大地」 農業農村整備情報総合センター 1996
- 知夫村小中学校教員会 『郷土学習資料集 知夫』 1990
- 知夫村総務課 「第三次知夫村総合振興計画」 知夫村 1991
- 横田町 「横田町町誌」
- 横田町 「横田町過疎地域活性化計画」
- 宝島社 「田舎暮らしの本」 1993-1999

(たかき まなぶ・博士後期過程)

Analyzing Phases of the Recent Phenomenon of Urban Population Movement into Underpopulated Rural Areas

Manabu TAKAKI

This population movement, caused by modernization and urbanization, has consistently flowed from rural areas to cities. Consequently, rural agricultural communities have declined and lost their vitality. Although nationwide development and activation plans for underpopulated areas have been drawn up in order to ease this problem, the exodus from rural areas has not been stemmed. Since the 1980s, however, the population has flowed in the opposite direction. This movement from cities into underpopulated rural areas, the so-called 'I-turn', is significant in that it appears to be a rejection of modernity and urbanization.

However it has been thought that this movement from cities into underpopulated rural areas caused mainly by problems of cities, and the subjective influence of underpopulated rural areas has been not made of as yet. In this article, I focus upon this subjective influence, and analyze their living conditions and their intentions.

In conclusion, I demonstrate that the movement into underpopulated areas has two main features: 1) the phenomenon of urban population movement into underpopulated rural areas has the side as a survival strategy of rural areas, and showed two inconsistent workings of rural people that is toward exclusion and toward assimilation, 2) there are a negotiated transaction Between local inhabitants and settlers ,that is called mutual compensation of the contrariness. I consider that rural areas are now real living spaces for the settlers rather than idealized locations for leisure consumption.